

源氏物語

乙女卷

与謝野晶子訳



一冊堂青空文庫

源氏物語

乙女

紫式部

與謝野晶子訳

雁^{かり}なくやつらははなれてただ一つ初恋
をする少年のごと
(晶子)

春になって女院の御一周年が過ぎ、官人が喪服を脱いだのに続いて四月の更衣期になったから、はなやかな空気の満ち渡った初夏であったが、前齋院はなお寂しくつれづれな日を送っておいでになった。庭

の桂かつらの木の若葉がたてるにおいにも若い女房たちは、宮の御在職中の加茂の院の祭りのころのことを恋しがった。源氏から、神の御禊みそぎの日もただ今はお静かでしょうという挨拶あいさつを持った使いが来た。

今日こんなことを思いました。

かけきやは川瀬の波もたちかへり君が御禊みそぎの藤ふぢのやつれを

紫の紙に書いた正しい立文たてぶみの形の手紙が藤の花の枝につけられてあつた。齋院はものの少し身にしむような日でおありになって、返事をお書きになつた。

藤衣ききは昨日きのふと思ふまに今日けふはみそぎの瀬にかはる世を

はかないものと思われます。

とだけ書かれてある手紙を、例のように源氏は熱心にながめていた。齋院が父宮の喪の済んでお服直しをされる時も、源氏からたいした贈り物が来た。女王にょおうはそれをお受けになることは醜いことであるというように言っておいでになつたが、求婚者としての言葉が添えられていることであれば辞退もできるが、これまで長い間何かの場合に公然の進物を送り続けた源氏であつて、親切からすることであるから返却のしようがないように言つて女房たちは困っていた。女五にょごの宮みやのほうへもこんなふうにして始終物質的に御補助をする源氏であつたか

ら、宮は深く源氏を愛しておいでになった。

「源氏の君というと、いつも美しい少年が思われるのだけれど、こんなに大人らしい親切を見せてくださる。顔がきれいな上に心までも並みの人に違つてでき上がっているのだね」

とおほめになるのを、若い女房らは笑っていた。西の女王とお逢いになる時には、

「源氏の大臣から熱心に結婚が申し込まれていらつしやるのだから、いいじゃありませんかね、今はじめての話ではなし、ずっと以前からのことなのですからね、お亡なくなりになった宮様もあなたが齋院におなりになった時に、結婚がせられなくなったことで失望をなすつてね、以前宮様がそれを実行しようとなすつた時に、あなたの気の進

まなかつたことで、話をそのままにしておいたのを御後悔してお話しになることがよくありましたよ。けれどもね、宮様がそうお思い立ちになったところは左大臣家の奥さんがいられたのですからね、そうしては三の宮がお気の毒だと思召して第二の結婚をこちらでおさせにはなりにくかつたのですよ。あなたと従妹いとこのその奥様が亡くなられたのだし、そうなすつてもいいのにと私は思うし、一方ではまた新しく熱心にお申し込みがあるというのは、やはり前生の約束事だろうと思う」

などと古めかしい御勧告をあそばすのを、女王は苦笑して聞いておいでになった。

「お父様からもそんな強情者じやうじやうしやに思われてきた私なのですから、今さら源氏の大臣の声名が高いからと申して結婚をいたしますのは恥ずかし

いことだと思ひます」

こんなふうに思ひもよらぬように言つておいでになつたから、宮もしまいにはお勧めにならなかつた。邸やしきの人は上から下まで皆が皆そうなるのを望んでゐることを女王は知つて警戒しておいでになつたが、源氏自身は至誠で女王を動かさうる日は待つてゐるが、しいて力で結婚を遂げるようなことをしたくないと女王の感情を尊重してゐた。

故太政大臣家で生まれた源氏の若君の元服の式を上げる用意がされてゐて、源氏は二条の院で行なわせたく思うのであつたが、祖母の宮が御覧になりたく思召すのがもつともで、そうしたことはお氣の毒に思われて、やはり今までお育てになつた宮の御殿でその式をした。右大将を始めおじぎみ伯父君たちが皆りっぱな顯官になつてゐて勢力のある人た

ちであつたから、母方の親戚からの祝品その他の贈り物もおびただし
かつた。かねてから京じゅうの騒ぎになるほど華美な祝い事になつた
のである。初めから四位にしようと思つてもいたことであつた
し、世間もそう見ていたが、まだきわめて小さい子を、何事も自分の
意志のとおりになる時代にそんな取り計らいをするのは、俗人のする
ことであるという気がしてきたので、源氏は長男に四位を与えること
はやめて、六位の浅葱あさぎの袍ほうを着せてしまった。大宮おおみやが言語道断のこと
のようにこれをお歎きになつたことはお道理でお気の毒に思われた。
源氏は宮に御面会をしてその問題でお話をした。

「ただ今わざわざ低い位に置いてみる必要もないようですが、私は考
えていることがございまして、大学の課程を踏ませようと思うのでご

ございます。ここ二、三年をまだ元服以前とみなしていてよかろうと存じます。朝廷の御用の勤まる人間になりますれば自然に出世はして行くことと存じます。私は宮中に育ちまして、世間知らずに御前で教養されたものでございますから、陛下おみずから師になつてくださつたのですが、やはり刻苦精励を体験いたしませんでしたから、詩を作りますことにも素養の不足を感じたり、音楽をいたしますにも音ね足らずな気持ちを感じたりいたしました。つまらぬ親にまさつた子は自然に任せておきましてはできようのないことかと思ひます。まして孫以下になりましたなら、どうなるかと不安に思われてなりませんことか、そう計らうのでございます。貴族の子に生まれまして、官爵が思ひのままに進んでまいり、自家の勢力に慢心した青年になりました

は、学問などに身を苦しめたりいたしますことはきつとばかばかしいことに思われるでしょう。遊び事の中に浸っていないながら、位だけはずんずん上がるようなことがありましたが、家に権勢のあります間は、心で嘲笑ちようしやうはしながらも追従をして機嫌きげんを人がそこねまいとしてくれますから、ちよつと見はそれでりっぱにも見えましようが、家の権力が失墜するとか、保護者に死に別れるとかしました際に、人から軽蔑けいべつされましても、なんらみずから恃たのむところのないみじめな者になります。やはり学問が第一でございます。やまとだましい日本魂をいかに活いかせて使うかは学問の根底があつてできることと存じます。ただ今目前に六位しか持たないのを見まして、たよりない気はいたしましても、将来の国家の柱石たる教養を受けておきますほうが、死後までも私の安心できる

ことかと存じます。ただ今のところは、とにかく私がいるのですから、窮迫した大学生と指さす者もなかりうと思ひます」

と源氏が言うのを、聞いておいでになつた宮は歎息をたんそくあそばしながら、

「ごもつともなお話だと思ひますがね、右大将などもあまりに変わつたお好みだと不審がりますし、子供もね、残念なようで、大将や左衛門督のかみなどの息子の、自分よりも低いもののように見下しておりました者の位階が皆上へ上へと進んで行きますのに、自分は浅葱あさぎの袍ほうを着ていねばならないのをつらく思うふうですからね。私はそれがかわいそうなのでした」

とお言ひになる。

「大人らしく父を恨んでいるのでございますね。どうでしょう、こんな小さい人が」

源氏はかわいくてならぬと思うふうで子を見ていた。

「学問などをいたしまして、ものの理解のできるようになりましたら、その恨みも自然になくなってまいるでしょう」

と言っていた。

若君の師から字あざなをつけてもらう式は東の院ですることになって、東の院に式場としての設けがされた。高官たちは皆この式を珍しがって参会する者が多かった。博士はかせたちが晴れがましがって気おくれもしそうである。

「遠慮をせずきまに定りどおりに厳格にやってください」

と源氏から言われたので、しいて冷静な態度を見せて、借り物の衣裳しょうの身に合わぬのも恥じずに、顔つき、声づかいに学者の衒気げんきを見せ、座にずっと並んでついたのはなはだ異様であった。若い役人などは笑いがおさえられないふうである。しかもこれは笑いやすいふうではない、落ち着いた人が酒瓶しゅへいの役に選ばれてあつたのである。すべてが風変わりである。右大将、民部卿などが丁寧に杯を勧めるのを見ても作法に合わないと叱しかり散らす、

「御接待役が多すぎてよろしくない。あなたがたは今日の学界がくがいにおける私を知らずに朝廷へお仕えになりますか。まちがったことじゃ」
などと言うのを聞いてたまらず笑い出す人があると、

「鳴りが高い、おやめなさい。はなはだ礼に欠けた方だ、座をお退ひき

なさい」

などと威す^{おど}。大学出身の高官たちは得意そうに微笑をして、源氏の教育方針のよいことに敬服したふうを見せているのであった。ちよつと彼らの目の前で話をして博士らは叱^{しか}る、無礼だと言つて何でもないこともとがめる。やかましく勝手気ままなことを言い放つている学者たちの顔は、夜になつて灯^ひがともったころからいつそう滑稽^{こっけい}なものに見えた。まつたく異様な会である。源氏は、

「自分のような規律に馴^なれないだらしのない者は粗相をして叱りまわされるであらうから」

と言つて、御簾^{みす}の中に隠れて見ていた。式場の席が足りないために、あとから来て帰つて行こうとする大学生のあるのを聞いて、源氏

はその人々を別に釣殿つりどののほうでもてなした。贈り物もした。式が終わって退出しようとする博士と詩人をまた源氏はとどめて詩を作ることにした。高官や殿上役人もそのほうの才のある人は皆残したのである。博士たちは律の詩、源氏その他の人は絶句を作るのであった。おもしろい題を文章博士もんじょうはかせが選んだ。短夜のころであつたから、夜がすつきり明けてから詩は講ぜられた。左中弁さちゅうべんが講師の役をしたのである。きれいな男の左中弁が重々しい神さびた調子で詩を読み上げるのが感じよく思われた。この人はことに深い学殖のある博士なのである。こうした大貴族の家に生まれて、栄華に戯れてもいるはずの人が蛭雪けいせつの苦を積んで学問を志すということをいろいろの譬えたとを借りて讚美さんびした作は句ごとにおもしろかつた。支那しなの人に見せて批評をさせてみたい

ほどの詩ばかりであると言われた。源氏のはむろん傑作であった。子を思う親の情がよく現われていると行って、列席者は皆涙をこぼしながら誦ずした。

それに続いてまた入学の式もあつた。東の院の中に若君の勉強部屋が設けられて、まじめな学者を一人つけて源氏は学ばせた。若君は大宮の所へもあまり行かないのであつた。夜も昼もおかわいがりにばかりなつて、いつまでも幼児であるように宮はお扱いになるのであつたから、そこでは勉強ができないであろうと源氏が認めて、学問所を別にして若君を入れたわけである。月に三度だけは大宮を御訪問申して、よいと源氏は定めた。じつと学問所にこもつてばかりいる苦しさに、若君は父君を恨めしく思った。ひどい、こんなに苦しまないでも出世

をして世の中に重んぜられる人がないわけはなからうと考えるのであるが、一体がまじめな性格であつて、けいちやう軽佻なところのない少年であつたから、よく忍んで、どうかして早く読まねばならぬ本だけは皆読んで、人並みに社会へ出て立身の道を進みたいと一所懸命になつたから、四、五か月のうちに史記などという書物は読んでしまった。もう大学の試験を受けさせてもよいと源氏は思つて、その前に自身の前で一度学力をためすことにした。例のおじ伯父の右大将、式部だゆう大輔、左中弁などだけを招いて、家庭教師の大内記に命じて史記の中の解釈のむづかしいところの、寮試の問題に出されそうな所々を若君に読ますのであつたが、若君は非常にめいりやう明瞭に難解なところを幾通りにも読んで意味を説明することができた。師のつめ爪じるしは一か所もつける必要のない

のを見て、人々は若君に学問をする天分の豊かに備わっていることを喜んだ。伯父の大將はまして感動して、

「父の大臣が生きていられたら」

と言つて泣いていた。源氏も冷静なふうを作ろうとはしなかった。

「世間の親が愛におぼれて、子に対しては正当な判断もできなくなつてゐるなどと私は見たこともありますが、自分のことになつてみると、それは子が大人になつただけ親はぼけていくのでやむをえないことだと解釈ができます。私などはまだたいした年ではないがやはりそうなりますね」

などと言いながら涙をふいているのを見る若君の教師はうれしかつた。名誉なことになつたと思つてゐるのである。大將が杯をさすとも

う深く酔いながら畏かしこまっている顔つきは気の毒なように瘦やせていた。変人と見られている男で、学問相当な地位も得られず、後援者もなく貧しかったこの人を、源氏は見るところがあつてわが子の教師に招いたのである。たちまちに源氏の庇護ひごを受ける身の上になつて、若君のために生まれ変わったような幸福を得ているのである。将来はましてこの今の若君に重用されて行くことであらうと思われた。

大学へ若君が寮試を受けに行く日は、寮門に頭官の車が無数に止まつた。あらゆる廷臣が今日はここへ来ることかと思われる列席者の派手はでに並んだ所へ、人の介添えを受けながらはいつて来た若君は、大學生の仲間とは見ることもできないような品のよい美しい顔をしていた。例の貧乏學生の多い席末の座につかねばならないことで、若君が

迷惑まごわそうな顔かほをしているのももつとも思おもわれた。ここでもまた叱しかるもの威いかく嚇おこするものがあつて不愉快ふげきであつたが、若君わかくみは少しも臆おくせずに進すすんで出て試験しけんを受けた。昔学問がくもんの盛さかんだつた時代じだいにも劣せらざ大学だいがくの栄さかえるころで、上中下の各階級かくかいきゅうから学生がくせいが出ていたから、いよいよ学問がくもんと見識けんしの備そなわつた人が輩出はいしゅつするばかりであつた。文人もんじんと擬生ぎしやうの試験しけんも若君わかくみは成績せいせきよく通とつたため、師しも弟子でしもいつそう励しんみが出て学業がくぎやうを熱心ねっしんにするようになった。源氏げんじの家いへでも始終詩会しかいが催もよほされなどして、博士はかせや文士ぶんしの得意とくいな時代じだいが来たように見みえた。何なにの道みちでも優秀ゆうしゆうな者の認たがめられないのはないのが当代たうだいであつた。

皇后こうごが冊立さくりつされることになつていたが、齋宮さいぐうの女御にょごは母君ははきみから委託ていすいされた方かたであるから、自分おれとしてはぜひこの方を推薦ていせんしなければなら

ないという源氏の態度であった。御母后も内親王でいられたあとへ、
またも王氏の^{きさき}後の立つことは一方に偏したことであると批難を加える
者もあつた。そうした人たちは弘徽殿の女御が^{こきでん}だれよりも早く^{こうきゆう}後宮に
はいった人であるから、その人の後に昇格されるのが当然であるとも
言うのである。双方に味方が現われて、だれもどうなることかと不安
がっていた。^{ひょうぐきよう}兵部卿の宮と申した方は今は^{しきぶきよう}式部卿になつておいでに
なつて、当代の御外戚として重んぜられておいでになる宮の姫君も、
予定どおりに後宮へはいつて、齋宮の女御と同じ王女御で侍している
のであるが、他人でない濃い御親戚関係もあることであつて、母后の
御代わりとして後に立てられるのが合理的な処置であらうと、そのほ
うを助ける人たちは言つて、三女御の競争になつたのであるが、結局

梅壺うめつぼの前斎宮が后におなりになった。女王の幸運に世間は驚いた。源氏が太政大臣になって、右大將が内大臣になった。そして関白の仕事しごとを源氏はこの人に譲ったのであった。この人は正義の觀念の強いりっぱな政治家である。学問を深くした人であるから韻塞いんふたぎの遊戯には負けたが公務を処理することに賢かった。幾人かの腹から生まれたい息は十人ほどあって、大人になって役人になっているのは次々に昇進するばかりであつたが、女は女御のほか一人よりない。それは親王家の姫君から生まれた人で、尊貴なことは嫡妻の子にも劣らないわけであるが、その母君が今は按察使大納言あぜちだいなごんの夫人になつていて、今の良人おとことの間に幾人かの子女が生まれている中において継父の世話を受けさせておくことはかわいそうであるといつて、大臣は引き取つてわが母

君の大宮に姫君をお託ししてあつた。大臣は女御を愛するほどには決してこの娘を愛してはいないのであるが、性質も容貌ようぼうも美しい少女であつた。そうしたわけで源氏の若君とこの人は同じ家で成長したのであるが、双方とも十歳を越えたころからは、別な場所に置かれて、どんなに親しい人でも男性には用心をしなければならぬと、大臣は娘を訓おしえて睦むつませないのを、若君の心に物足らぬ気持ちがあつて、花や紅もみ葉じを贈ること、雛遊ひなびの材料を提供することなどに真心を見せて、なお遊び相手である地位だけは保留していたから、姫君もこの従弟いとこを愛して、男に顔を見せぬというような、普通の慎みなどは無視されてきた。乳母めのとなどという後見役の者も、この少年少女には幼い日からついた習慣があるのであるから、にわかには厳格に二人の間を隔てることは

できないと大目に見ていたが、姫君は無邪気一方であつても、少年のほうの感情は進んでいて、いつの間にか情人の關係にまで到いたつたらしい。東の院へ学問のために閉じこめ同様になつたことは、このことがあるために若君を懊惱おうれうさせた。まだ子供らしい、そして未来の上達の思われる字で、二人の恋人が書きかわしている手紙が、幼稚な人たちのすることであるから、抜け目があつて、そこらに落ち散らされてもあるのを、姫君付きの女房が見て、二人の交情がどの程度にまでなつているかを合点する者もあつたが、そんなことは人に訴えてよいことでもないから、だれも秘密はそつとそのまま秘密にしておいた。きせき 后の宮、両大臣家の大饗宴きようえんなども済んで、ほかの催し事が続いて仕度したくされねばならぬということもなくて、世間の静かなころ、秋の通り雨が過

ぎて、萩おぎの上風も寂しい日の夕方に、大宮のお住居すまいへ内大臣が御訪問に
来た。大臣は姫君を宮のお居間に呼んで琴などを弾ひかせていた。宮
はいろいろな芸のおできになる方で、姫君にもよく教えておありに
なつた。

「琵琶びわは女が弾ひくとちよつと反感も起こりますが、しかし貴族的なよ
いものですね。今日はごまかしでなくほんとうに琵琶の弾けるという
人はあまりなくなりました。何親王、何の源氏」

などと大臣は数えたあとで、

「女では太政大臣が嵯峨さかの山荘に置いておく人というのが非常に巧うまい
そうですね。さかのぼって申せば音楽の天才の出た家筋ですが、京官
から落伍らくごして地方にまで行った男の娘に、どうしてそんな上手じょうずが出て

来たのでしよう。源氏の大臣はよほど感心していられると見えて、何かのおりにはよくその人の話をせられます。ほかの芸と音楽は少し性質が変わっていて、多く聞き、多くの人と合わせてもらおうことですつと進歩するものですが、独習をしていて、その域に達したというのは珍しいことです」

こんな話もしたが、大臣は宮にお弾きになることをお奨めすすした。

「もう絃いとを押すことなどが思うようにできなくなりましたよ」

とお言いになりながらも、宮は上手に琴をお弾きになった。

「その山莊の人というのは、幸福な人であるばかりでなく、すぐれた聡明そうめいな人らしいですね。私に預けてくださったのは男の子一人である方の女の子もできていたらどんなによかったろうと思う女の子をその

人は生んで、しかも自分がつれていては子供の不幸になることをよく理解して、りっぱな奥さんのほうへその子を渡したことなどを、感心なものだと私も話に聞きました」

こんな話を大宮はあそばした。

「女は頭によさでどんなにも出世ができるものですよ」

などと内大臣は人の批評をしていたのであるが、それが自家の不幸な話に移っていった。

「私は女御を完全でなくても、どんなことも人より劣るような娘には育て上げなかったつもりなんです、意外な人に負ける運命を持つていたのですね。人生はこんなに予期にはずれるものかと私は悲觀的になりました。この子だけでも私は思うような幸運をになわせたい、東

宮の御元服はもうそのうちのことであろうかと、心中ではその希望を
持っていたのですが、今のお話の明石あかしの幸運女が生んだお後の候補者
があとからずんずん生長してくるのですからね。その人が後宮へは
いったら、ましてだれが競争できますか」

大臣が歎息するのを宮は御覧になって、

「必ずしもそうとは言われませんよ。この家からお後の出ないような
ことは絶対にないと私は思う。そのおつもりで亡なくなられた大臣も女
御の世話を引き受けて皆なすったのだものね。大臣がおいでになった
らこんな意外な結果は見なかつたでしょう」

この問題でだけ大宮は源氏を恨んでおいでになった。姫君がこぢん
まりとした美しいふうで、十三絃げんの琴を弾いている髪つき、顔と髪

接点の美などの艶えんな上品さに大臣がじつと見入っているのを姫君が

知って、恥ずかしそうにからだを少し小さくしている横顔がきれいで、

絃いとを押す手つきなどの美しいのも絵に描いたように思われるのを、

大宮も非常にかわいく思召おぼしめされるふうであつた。姫君はちよつと

掻かき合わせをした程度で弾きやめて琴を前のほうへ押し出した。内大

臣はやまとこと大和琴を引き寄せて、律の調子の曲のかえつて若々しい気のする

ものを、名手であるこの人が、粗弾あらびきに弾き出したのが非常におもしろく聞こえた。外では木の葉がほろほろとこぼれている時、老いた女

房などは涙を落としながらあちらこちらの几帳きちようの蔭かげなどに幾人かずつ

集まつてこの音楽に聞き入っていた。「風かぜの力蓋けだし少なし」らくえふびふう（落葉俟二

をまつてもつておかうしてかぜのちからけだしすく春りしやうがようもんにあひてなくきんのかんもつてすゑなり

微一※以隕、而風之力蓋寡、孟嘗遭二雍門一而泣、琴之感以末。もん）と文

選せんの句を大臣は口ずさんで、

「琴の感じではないが身にしむ夕方ですね。もう少しお弾きになりませんか」

と大臣は大宮にお勧めして、秋風楽を弾きながら歌う声もよかったです。宮はこの座の人は御孫ごそんじよ女ばかりでなく、大きな大臣までもかわいく思召された。そこへいつそうの御満足を加えるように源氏の若君が来た。

「こちらへ」

と宮はお言いになって、お居間の中の几帳を隔てた席へ若君は通された。

「あなたにはあまり逢いませぬね。なぜそんなにむきになって学問ば

かりをおさせになるのだろう。あまり学問のできすぎることは不幸を招くことだと大臣も御体験なすったことなのだけれど、あなたをまたそうおしつけになるのだね、わけのあることでしょうが、ただそんなふうに関じ込められていてあなたがかわいそうでならない」

と内大臣は言った。

「時々は違ったこともしてごらんさい。笛だって古い歴史を持った音楽で、いいものなのですよ」

内大臣はこう言いながら笛を若君へ渡した。若々しく朗らかな音^ねを吹き立てる笛がおもしろいためにしばらく絃楽のほうはやめさせて、大臣はぎょうさんなふうでなく拍子を取りながら、「萩^{はぎ}が花ずり」

(衣がへせんや、わが衣は野原篠原萩^{しのはら}の花ずり) など歌っていた。

「太政大臣も音楽などという芸術が大好きで、政治のほうのことからお脱ぬけになったのですよ。人生などというものは、せめて好きな楽しみでもして暮らしてしまいたい」

と言いながら甥おいに杯を勧めなどしているうちに暗くなったので灯ひが運ばれ、湯漬づけ、菓子などが皆の前へ出て食事が始まった。姫君はもうあちらへ帰してしまったのである。しいて二人を隔てて、琴の音すらも若君に聞かせまいとする内大臣の態度を、大宮の古女房たちはささやき合つて、

「こんなことで近いうちに悲劇の起こる気がします」
とも言っていた。

大臣は帰って行くふうだけを見せて、情人である女の部屋にはいっ

ていたが、そつとからだを細くして廊下を出て行く間に、少年たちの恋を問題にして語る女房たちの部屋があつた。不思議に思つて立ち止まつて聞くと、それは自身が批評されているのであつた。

「賢がつていらつしやつても甘いのが親ですね。とんだことが知らぬ間に起こつていいるのですがね。子を知るは親にしかずなどというのは嘘うそですよ」

などこそそそと言つていた。情けない、自分の恐れていたことが事実になつた。打つちやつて置いたのではないが、子供だから油断をしたのだ。人生は悲しいものであると大臣は思った。すべてを大臣は明らかに悟つたのであるが、そつとそのまま出てしまつた。前駆がたてる人払いの声のぎょうさんなのに、はじめて女房たちはこの時間まで

も大臣がここに留まっていたことを知ったのである。

「殿様は今お帰りになるではありませんか。どこの隅すみにはいつておいでになったのでしょうか。あのお年になって浮気うわきはおやめにならない方ね」

と女房らは言っていた。内証話をしていた人たちは困っていた。

「あの時非常にいいにおいが私らのそばを通ったと思いましたがね、若君がお通りになるのだとばかり思っていましたよ。まあこわい、悪口がお耳にはいらなかったでしょうか。意地悪をなさらないとも限りませんね」

内大臣は車中で娘の恋愛のことばかりが考えられた。非常に悪いことではないが、従弟いとこどうしの結婚などはあまりにありふれたことすぎ

るし、野合の初めを世間の噂うわさに上されることもつらい。後宮の競争に女御をおさえた源氏が恨めしい上に、また自分はその失敗に代えてあの娘を東宮へと志していたのではないか、僥倖きょうこうがあるいはそこにあるかもしれないと、ただ一つの慰めだったこともこわされたと思うのであった。源氏と大臣との交情は睦むつまじく行っているのであるが、昔もその傾向があったように、負けたくない心が断然強くて、大臣はそのことが不快であるために朝まで安眠もできなかつた。大宮も様子を悟っておいでになるであろうが、非常におかわいくお思いになる孫であるから勝手なことをさせて、見ぬ顔をしておいでになるのであるかと女房たちの言っていた点で、大臣は大宮を恨めしがっていた。腹がたつとそれを内におさえることのできない性質で大臣はあつた。

二日ほどしてまた内大臣は大宮を御訪問した。こんなふうにしきりに出て来る時は宮の御機嫌きげんがよくて、おうれしい御様子がかがわれた。形式は尼になっておいでになる方であるが、髪で額を隠して、お化粧もきれいにあそばされ、はなやかな小桂こうちぎなどにもお召しかえになる。子ながらも晴れがましくお思われになる大臣で、ありのままの姿ではお逢いにならないのである。内大臣は不機嫌な顔をしていた。「こちらへ上がっておりますしても私は恥ずかしい気がいたしまして、女房たちはどう批評をしていることだろうかと心が置かれます。つまらない私ですが、生きておりますうちは始終伺って、物足りない思いをおさせせず、私もその点で満足を得たいと思つたのですが、不良な娘のためにあなた様をお恨めしく思わずにいられますようなことが

できてまいりました。そんなに真剣にお恨みすべきでない、自分ながら心をおさえようとするのでございますが、それができませんで」

大臣が涙を押しぬぐうのを御覧になって、お化粧あそばした宮の顔の色が変わった。涙のために白粉が落ちてお目も大きくなった。

「どんなことがあって、この年になってからあなたに恨まれたりするのだらう」

と宮の仰せられるのを聞くと、さすがにお気の毒な気のする大臣であつたが続いて言った。

「御信賴しているものですから、子供をお預けしまして、親である私はかえって何の世話もいたしませんで、手もとに置きました娘の後宮こうきゆう

のはげしい競争に敗^{はいざん}惨の姿になって、疲れてしまっておりませう方のとばかりを心配して世話をやいておりました、こちらに御^{やっかい}厄介になりませう以上は、私がそんなふうに捨てて置きましたも、あなた様は彼を一人並みの女にしてくださいませうことと期待していたのですが、意外なことになりましたから、私は残念なのです。源氏の大臣は天下の第一人者といわれるりっぱな方ではありますがほとんど家の中どうしのような者のいっしょになりますことは、人に聞こえましても軽率に思われることです。低い身分の人たちの中でも、そんなことは世間へはばかつてさせないものです。それはあの人のためにもよいことでは決してありません。全然離れた家へはなやかに婿として迎えられることがどれだけ幸福だかしれませう。従^{いとこ}姉の縁で強^しいた結婚だというよう

に取られて、源氏の大臣も不快にお思いになるかもしれませんよ。それにしましてもそのことを私へお知らせくださいましたら、私はまた計らいようがあるというものです。ある形式を踏ませて、少しは人間きをよくしてやることもできたでしょうが、あなた様が、ただ年若な者のする放縦な行動そのままにお捨て置きになりましたことを私は遺憾いかにに思うのです」

くわしく大臣が言うことによつて、はじめて真相をお悟りになつた宮は、夢にもお思いにならないことであつたから、あきれておしまひになつた。

「あなたがそうお言いになるのはもつともだけれど、私はまったく二人の孫が何を思つて、何をしているかを知りませんでした。私こそ残

念でなりませんのに、同じように罪を私が負わせられるとは恨めしいことです。私は手もとへ来た時から、特別にかわいくて、あなたがそれほどにしようとお思いにならないほど大事にして、私はあの人に女の最高の幸福を受けうる価値もつけようとしてました。一方の孫を溺^で愛^{あい}して、ああしたまだ少年の者に結婚を許そうなどは思いもよらぬことです。それにしても、だれがあなたにそんなことを言ったのでしょうか。人の中傷かもしれぬことで、腹をお立てになつたりなさるところとはよくないし、ないことで娘の名に傷をつけてしまうことにもなりませんよ」

「何のないことだものですか。女房たちも批難して、蔭^{かげ}では笑つていふことでしようから、私の心中は穏やかでありようがありません」

と言つて大臣は立つて行つた。幼い恋を知っている人たちは、この破局に立ち至つた少年少女に同情していた。先夜の内証話をした人たちは逆上もしてしまいそうになつて、どうしてあんな秘密を話題にしたのであろうと後悔に苦しんでいた。

姫君は何も知らずにいた。のぞいた居間に可憐な美しい顔をして姫君がすわっているのを見て、大臣の心に父の愛が深く湧いた。

「いくら年が行かないからといって、あまりに幼稚な心を持っているあなただとは知らないで、われわれの娘としての人並みの未来を私はいろいろに考えていたのだ。あなたよりも私のほうが廃り物になつた気がする」

と大臣は言つて、それから乳母を責めるのであつた。乳母は大臣に

対して何とも弁明ができない。ただ、

「こんなことでは大事な内親王様がたにもあやまちのあることを昔の小説などで読みましたが、それは御信頼を裏切るおそ^すばの者があつて、男の方のお手引きをするとか、また思いがけない隙^すができたとかいうことで起きるのですよ。こちらのことは何年も始終ごいっしょに遊んでおいでになった間なんですもの。お小さくはいらっしやるし宮様が寛大にお扱いになる以上にわれわれがお制しすることはできないとそのままに見ておりましたけれど、それも一昨年ごろからはつきりと日常のことが御区別できませんでしたし、またあの方が同じ若い人といつてもだらしのない不良なふうなどは少しもない方なのでしたから、まったく油断をいたしましたわね」

などと自分たち仲間なげで歎いているばかりであった。

「で、このことはしばらく秘密にしておこう。評判はどんなにしているも立つものだが、せめてあなたたちは、事実でないと否定をすることに骨を折るがいい。そのうち私の邸やしきへつれて行くことにする。宮様の御好意が足りないからなのだ。あなたがたはいくら何だつても、こくなれと望んだわけではないだろう」

と大臣が言うと、乳母たちは、大宮のそう取られておいでになることをお気の毒に思いながらも、また自家のあかりが立ててもらえたようにうれしく思った。

「さようでございますとも、大納言家への聞こえということも私たちは思っているのでございますもの、どんなに人柄がごりっぱでも、た

だの御縁におつきになることなどを私たちは希望申し上げるわけはございません」

と言う。姫君はまったく無邪気で、どう戒めても、訓おしえてもわかりそうにないのを見て大臣は泣き出した。

「どういふふうに体裁を繕すたえばいいか、この人を廃すたり物にしないためには」

大臣は二、三人と密議するのであった。この人たちは大宮の態度がよろしくなかったことばかりを言い合った。

大宮はこの不祥事を二人の孫のために悲しんでおいでになったが、その中でも若君のほうをお愛しになる心が強かったのか、もうそんなに大人びた恋愛などのできるようになったかとかわいくお思われにな

らないでもなかった。もつてのほかのように言った内大臣の言葉を肯定あそばすこともできない。必ずしもそうであるまい、たいした愛情のなかつた子供を、自分がたいせつに育ててやるようになったため、東宮の後宮というような志望も父親が持つことになったのである。それが実現できなくて、普通の結婚をしなければならぬ運命になれば、源氏の長男以上のすぐれた婿があるものではない。容貌をようぼうはじめとして何から言つても同等の公達きんたちのあるわけはない、もつと価値の低い婿を持たねばならない気がする、やや公平でない御愛情から、大臣を恨んでおいでになるのであったが、宮のこのお心持ちを知つたらまして大臣はお恨みすることであろう。

自身のことでこんな騒ぎのあることも知らずに源氏の若君が来た。

一昨夜は人が多くいて、恋人を見ることのできなかつたことから、恋しくなつて夕方から出かけて来たものであるらしい。平生大宮はこの子をお迎えになると非常におうれしそうな顔をあそばしておよろこびになるのであるが、今日はまじめなふうでお話をあそばしたあとで、

「あなたのことで内大臣が来て、私までも恨めしそうに言つてましたから気の毒でしたよ。よくないことをあなたは始めて、そのために人が不幸になるではありませんか。私はこんなふうに言いたくはないのだけれど、そういうことのあるのを、あなたが知らないでいてはと思つてね」

とお言いになつた。少年の良心にとがめられていることであつたか

ら、すぐに問題の真相がわかった。若君は顔を赤くして、

「なんででしょう。静かな所へ引きこもりましてからは、だれとも何の交渉もないのですから、伯父様おじの感情を害するようなことはないはずだと私は思います」

と言つて羞恥しゅうちに堪えないように見えるのをかわいそうに宮は思召おぼしめした。

「まあいいから、これから気をおつけなさいね」

とだけお言いになつて、あとはほかへ話を移しておしまいになつた。これからは手紙の往復もいっそう困難になることであろうと思つと、若君の心は暗くなつていった。晚餐ばんさんが出てあまり食わずに早く寝てしまつたふうは見せながらも、どうかして恋人に逢おうと思つこ

とで夢中になつていた若君は、皆が寝入つたところを見計らつて姫君の居間との間の襖子からかみをあけようとしたが、平生は別に錠とぎなどを掛けることもなかつた仕切りが、今夜はしかと鎖とぎされてあつて、向こう側に人の音も聞こえない。若君は心細くなつて、襖子によりかかっていると、姫君も目をさましていて、風の音が庭先の竹にとまつてそよそよと鳴つたり、空を雁かりの通つて行く声のほのかに聞こえたりすると、無邪気な人も身にしむ思いが胸にあるのか、「雲井の雁もわがごとや」（霧深き雲井の雁もわがごとや晴れもせず物の悲しかるらん）と口ずさんでいた。その様子が少女らしくきわめて可憐かれんであつた。若君の不安さはつのもつて、

「ここをあけてください、小侍従はいませんか」

と言った。あちらには何とも答える者が無い。小侍徒は姫君の乳母めのとの娘である。独言ひとりごとを聞かれたのも恥ずかしくて、姫君は夜着を顔に被かぶってしまったのであったが、心では恋人を憐あわれんでいた、大人のよう
に。乳母などが近い所に寝ていてみじろぎも容易にできないのである。それきり二人とも黙っていた。

さ夜中に友よびわたる雁がねにうたて吹きそふ萩あきのうは風

身にしむものであると若君は思いながら宮のお居間のほうへ帰ったが、歎息たんそくしてつく吐息といきを宮がお目ざめになってお聞きにならぬかと遠慮されて、みじろぎながら寝ていた。

若君はわけもなく恥ずかしくて、早く起きて自身の居間のほうへ行き、手紙を書いたが、二人の味方である小侍従にも逢うことができず、姫君の座敷のほうへ行くこともようせずに煩悶はんもんをしていた。女のほうも父親にしかられたり、皆から問題にされたりしたことだけが恥ずかしくて、自分がどうなるとも、あの人はどうなっていくとも深くは考えていない。美しく二人が寄り添って、愛の話をするのが悪いこと、醜いこととは思えなかった。そうした場合がなつかしかった。こんなに皆に騒がれることが至当なこととは思われないのであるが、乳母などからひどい小言こごとを言われたあとでは、手紙を書いて送ることもできなかつた。大人はそんな中でも隙すきをとらえることが不可能でなからうが、相手の若君も少年であつて、ただ残念に思っているだけで

あつた。

内大臣はそれきりお訪ねたずはしないのであるが宮を非常に恨めしく思っていた。夫人には雲井の雁の姫君の今度の事件についての話をしなかつたが、ただ気むずかしく不機嫌ふきげんになつていた。

「中宮がはなやかな儀式で立后後の宮中入りをなすつたこの際に、女御ごが同じ御所でめいつた気持ちで暮らしているかと思つたと私はたまらないから、退出させて気楽に家うちで遊ばせてやりたい。さすがに陛下はおそばをお離しにならないようにお扱いになつて、夜昼上の御局みつぼねへ上がつてゐるのだから、女房たちなども緊張してばかりいなければならぬのが苦しそうだから」

こう夫人に語つてゐる大臣はにわかになつて女御退出のお暇みかどを帝へ願ひ出

た。御寵愛ちようあいの深い人であったから、お暇を許しがたく帝は思召みかど おぼしめしたのであるが、いろいろなことを言い出して大臣が意志を貫徹しようとするので、帝はしぶしぶ許しあそばされた。自邸に帰った女御に大臣は、

「退屈でしょうから、あちらの姫君を呼んでいっしょに遊ぶことなどなさい。宮にお預けしておくことは安心なようではあるが、年の寄った女房があちらには多すぎるから、同化されて若い人の憤み深さがなくなつてはと、もうそんなことも考えなければならぬ年ごろになつていますから」

こんなことを言つて、にわかには雲井の雁を迎えることにした。大宮は力をお落としになつて、

「たった一人あつた女の子が亡なくなってから私は心細い気がして寂しがつていた所へ、あなたが姫君をつれて来てくれたので、私は一生ながめて楽しむことのできる宝のように思つて世話をしていたのに、この年になつてあなたに信用されなくなつたかと思うと恨めしい気がします」

とお言いになると、大臣はかしまつて言った。

「遺憾いかんな氣のしましたことは、その場でありのままに申し上げただけのことでございます。あなた様を御信用申さないようなことが、どうしてあるものでございますか。御所におります娘が、いろいろと朗らかでないふうでこの節邸やしきへ歸つておりますから、退屈そうなのが哀れでございますして、いっしょに遊んで暮らせばよいと思ひまして、一時

的につれてまいるのでございます」

また、

「今日までの御養育の御恩は決して忘れさせません」

とも言った。こう決めたことはとどめても思い返す性質でないことを御承知の宮はただ残念に思召すばかりであった。

「人というものは、どんなに愛するものでもこちらをそれほどには思ってはくれないものだね。若い二人がそうではないか、私に隠して大事件を起こしてしまっただけではないか。それはそれでも大臣はりっぱなでき上がった人でいながら私を恨んで、こんなふうにして姫君をつれて行ってしまおう。あちらへ行つてここにいる以上の平和な日があるものとは思われないよ」

お泣きになりながら、こう女房たちに宮は言っておいでになった。ちようどそこへ若君が来た。少しの隙すきでもないかとこのごろはよく出て来るのである。内大臣の車が止まっているのを見て、心の鬼にきまり悪さを感じた若君は、そつとはいつて来て自身の居間へ隠れた。内大臣の息子たちである左少将さしやうしょう、少納言しょうなごん、兵衛佐ひょうえのすけ、侍従じじゆう、大夫だいいふなどという人らもこのお邸やしきへ来るが、御簾みすの中へはいることは許されていないのである。左衛門督さえもんのかみ、権中納言ごんちゆうなごんなどという内大臣の兄弟はほかの母君から生まれた人であったが、故人の太政大臣が宮へ親子の礼を取らせていた関係から、今も敬意を表しに来て、その子供たちも出入りするのであるが、だれも源氏の若君ほど美しい顔をしたのはなかつた。宮のお愛しになることも比類のない御孫であったが、そのほかには雲井

の雁だけがお手もとで育てられてきて深い御愛情の注がれている御孫であつたのに、突然こうして去つてしまふことになつて、お寂しくなることを宮は歎なげいておいでになつた。大臣は、

「ちよつと御所へ参りまして、夕方に迎えに来ようと思ひます」

と言つて出て行つた。事實に潤色を加えて結婚をさせてもよいとは大臣の心にも思われたのであるが、やはり残念な気持ち勝ちが勝つて、ともかくも相当な官歴ができたころ、娘への愛の深さ浅さをも見て、許すにしても形式を整えた結婚をさせたい、嚴重に監督しても、そこが男の家でもある所に置いては、若いどうしは放縦ほうじゆうなことをするに違ちがひない。宮もしいて制しようとはあそばさないであらうからとこう思つて、女御によごのつれづれに託して、自家のほうへも官邸へも軽いふうを

装って伴い去ろうと大臣はするのである。宮は雲井の雁へ手紙をお書きになった。

大臣は私を恨んでいるかしりませんが、あなたは、私がどんなにあなたを愛しているかを知っているでしょう。こちらへ逢いに来てください。

宮のお言葉に従って、きれいに着かざった姫君が出て来た。年は十四なのである。まだ大人にはなりきってはいないが、子供らしくおとなしい美しさのある人である。

「始終あなたをそばに置いて見ることが、私のなくてはならぬ慰めだったのだけれど、行ってしまつては寂しくなることでしょう。私は年寄りだから、あなたの生おい先が見られないだろうと、命のなくなるのを

心細がったものですがね。私と別れてあなたの行く所はどこかと思うとかわいそうでならない」

と言つて宮はお泣きになるのであつた。雲井の雁は祖母の宮のお歎なげきの原因に自分の恋愛問題がなつているのであると思つと、羞恥しゆうちの感に堪えられなくて、顔も上げることができずに泣いてばかりいた。

若君の乳母の宰相の君が出て来て、

「若様とごいっしよの御主人様だとただ今まで思つておりましたのに行つておしまいになるなどは残念なことでございます。殿様がほかの方と御結婚をおさせになろうとあそばしましても、お従いにならぬようにあそばせ」

などと小声で言つと、いよいよ恥ずかしく思つて、雲井くもいの雁かりはもの

も言えないのである。

「そんな面倒めんどうな話はしないほうがよい。縁だけはだれも前生から決められているのだからわからない」

と宮がお言いになる。

「でも殿様は貧弱だと思召おぼしめして若様を軽蔑けいべつあそばすのでございませうから。まあお姫様見ておいであそばせ、私のほうの若様が人におくれをおとりになる方かどうか」

口惜くちおしがっている乳母はこんなことも言うのである。若君は几帳きちょうの後ろへはいつて来て恋人をながめていたが、人目を恥じることなどはもう物の切迫しない場合のことで、今はそんなことも思われずに泣いているのを、乳母はかわいそうに思っ、宮へは体裁よく申し上げ、

夕方の暗まぎれに二人をほかの部屋で逢わせた。きまり悪さと恥ずかしさで二人はものも言わずに泣き入った。

「伯父様おじの態度が恨めしいから、恋しくても私はあなたを忘れてしまおうと思うけれど、逢わないでいてはどんなに苦しいだろうと今から心配でならない。なぜ逢えば逢うことのできたころに私はたびたび来なかつたらう」

と言う男の様子には、若々しくてそして心を打つものがある。

「私も苦しいでしょう、きつと」

「恋しいだろうとお思ひになる」

と男が言うと、雲井の雁が幼いふうになずく。座敷には灯ひがともされて、門前からは大臣の前駆おおぎよの者が大仰おおぎよに立てる人払いの声が聞こ

えてきた。女房たちが、

「さあ、さあ」

と騒ぎ出すと、雲井の雁は恐ろしがってふるえ出す。男はもうどうでもよいという気になって、姫君を帰そうとしないのである。姫君の乳母が捜しに来て、はじめて二人の会合を知った。何といういまわしいことであろう、やはり宮はお知りにならなかったのではなかったかと思うと、乳母は恨めしくてならなかった。

「ほんとうにまあ悲しい。殿様が腹をおたてになって、どんなことをお言い出しになるかshれないばかりか、大納言家でもこれをお聞きになつたらどうお思いになることだろう。貴公子でおありになつても、最初の殿様が浅葱あさぎの袍ほうの六位の方とは」

こう言う声も聞こえるのであった。すぐ二人のいる屏風びょうぶの後ろに来て乳母はこぼしているのである。若君は自分の位の低いことを言つて侮辱しているのであると思うと、急に人生がいやなものに思われてきて、恋も少しさめる気がした。

「そらあんなことを言っている。」

くれなるの涙に深き袖そでの色を浅緑とやいひしをるべき

「恥ずかしくてならない」

と言つと、

いろいろに身のうきほどの知らるるはいかに染めける中の衣ぞ

62

と雲井の雁が言ったか言わぬに、もう大臣が家の中にはいつて来たので、そのまま雲井の雁は立ち上がった。取り残された見苦しさも恥ずかしくて、悲しみに胸をふさがらせながら、若君は自身の居間へはいつて、そこで寝つこうとしていた。三台ほどの車に分乗して姫君の一行は邸やしきをそつと出て行くらしい物音を聞くのも若君にはつらく悲しかったから、宮のお居間から、来るようにと、女房を迎えにおよこしになった時にも、眠ったふうをしてみじろぎもしなかつた。涙だけがまだ止まらずに一睡もしないで暁になった。霜の白いころに若君は急いで出かけて行った。泣き腫はらした目を人に見られることが恥ずかし

いのに、宮はきつとそばへ呼ぼうとされるのであろうから、気楽な場所へ行ってしまうたくなつたのである。車の中でも若君はしみじみと破れた恋の悲しみを感じるのであつたが、空模様もひどく曇つて、まだ暗い寂しい夜明けであつた。

霜氷うたて結べる明けぐれの空かきくらし降る涙かな

こんな歌を思つた。

今年源氏は五節ごせちの舞い姫を一人出すのであつた。たいした仕度したくといふものではないが、付き添いの童女の衣裳いしやうなどを日が近づくので用意させていた。東の院の花散里夫人はなちるさとは、舞い姫の宮中へはいる夜の、付

き添いの女房たちの装束を引き受けて手もとで作らせていた。二条の院では全体にわたっての一通りの衣裳が作られているのである。中宮からも、童女、下仕えの女房幾人かの衣服を、華奢かしやに作って御寄贈になった。去年は諒闇りょうあんで五節のなかったせいもあって、だれも近づいて来る五節に心をおどらせている年であるから、五人の舞い姫を一人ずつ引き受けて出す所々では派手はでが競われているという評判であった。按察使大納言あぜちの娘、左衛門督さえもんのかみの娘などが出ることになっていた。それから殿上役人の中から一人出す舞い姫には、今は近江守おうみのかみで左中弁を兼ねている良清朝臣よしきよあそんの娘がなることになっていた。今年の舞い姫はそのまま続いて女官に採用されることになっていたので、愛嬢を惜しまずに出すのであると言われていた。源氏は自身から出す舞い姫に、摂津

守兼左京大夫である惟光これみつの娘で美人だと言われている子を選んだのである。惟光は迷惑がっていたが、

「大納言が妾腹の娘を舞い姫に出す時に、君の大事な娘を出したつても恥ではない」

と責められて、困ってしまった惟光は、女官になる保証のある点がよくからとあきらめてしまつて、主命に従うことにしたのである。舞けいこの稽古などは自宅でよく習わせて、舞い姫を直接世話するいわゆるかかしずきの幾人だけはその家で選んだのをつけて、初めの日の夕方ごろに二条の院へ送つた。なお童女幾人、下仕しもえ幾人が付き添いに必要なのであるから、二条の院、東の院を通じてすぐれた者を多数の中から選より出すことになつた。皆それ相応に選定される名誉を思つて集まつ

て来た。陛下が五節ごせちの童女だけを御覧になる日の練習に、縁側を歩かせて見て決めようと源氏はした。落選させてよいような子供もない、それぞれに特色のある美しい顔と姿を持っているのに源氏はかえって困った。

「もう一人分の付き添いの童女を私のほうから出そうかね」
などと笑っていた。結局身の取りなしのよさと、品のよい落ち着きのある者が採られることになった。

大学生の若君は失恋の悲しみに胸が閉じられて、何にも興味が持てないほど心がめいって、書物も読む気のしないほどの気分がいくぶん慰められるかもしれぬと、五節の夜は二条の院に行っていた。風采ふうさいがよくて落ち着いた、艶えんな姿の少年であったから、若い女房あこなどから憧

憬がれを持たれていた。夫人のいるほうでは御簾みすの前へもあまりすわらせぬように源氏は扱うのである。源氏は自身の経験によつて危険がるのか、そういうふうであつたから、女房たちすらも若君と親しくする者はいないのであるが、今日は混雑の紛れに室内へもはいつて行つたものらしい。車で着いた舞い姫をおろして、妻戸の所の座敷に、屏風びょうぶな どで囲いをして、舞い姫の仮の休息所へ入れてあつたのを、若君はそつと屏風の後ろからのぞいて見た。苦しうにして舞い姫はからだを横向きに長くしていた。ちようど雲井くもいの雁かりと同じほどの年ごろであつた。それよりも少し背が高くて、全体の姿にあざやかな美しさのある点は、その人以上にさえも見えた。暗かつたからよくは見えないのであるが、年ごろが同じくらいで恋人の思われる点がうれしくて、

恋が移ったわけではないがこれにも関心は持たれた。若君は衣服の褻つま先さきを引いて音をさせてみた。思いがけぬことで怪しがる顔を見て、

「天あめにます豊岡とよをか姫の宮人もわが志すしめを忘るな

『みづがきの』（久しき世より思ひ初そめてき）」

と言ったが、藪やぶから棒ということのようである。若々しく美しい声をしてているが、だれであるかを舞い姫は考え当てることもできない。気味悪く思っている時に、顔の化粧を直しに、騒がしく世話役の女が幾人も来たために、若君は残念に思いながらその部屋を立ち去った。浅葱あさぎの袍ほうを着て行くことがいやで、若君は御所へ行くこともしなかつ

たが、五節を機会に、好みの色の直衣のうしを着て宮中へ出入りすることを若君は許されたので、その夜から御所へも行った。まだ小柄な美少年は、若公わかきん達らしく御所の中を遊びまわっていた。帝をはじめとしてこの人をお愛しになる方が多く、ほかには類もないような御恩寵おんちゆうを若君は身に負っているのであった。

五節の舞い姫がそろって御所へはいる儀式には、どの舞い姫も盛装を凝らしていたが、美しい点では源氏のと、大納言の舞い姫がすぐれていると若い役人たちはほめた。実際一人ともきれいであつたが、ゆつたりとした美しさはやはり源氏の舞い姫がすぐれていて、大納言のほうのは及ばなかつたようである。きれいで、現代的で、五節の舞い姫などというもののようでないつくりにした感じよさがこうほめら

れるわけであった。例年の舞い姫よりも少し大きくて前から期待されていたのにそむかない五節の舞い姫たちであった。源氏も参内して陪観したが、五節の舞い姫の少女が目にとまった昔を思い出した。辰の日の夕方に大式だいにの五節へ源氏は手紙を書いた。内容が想像されないでもない。

少女をとめごも神さびぬらし天つ袖そでふるき世の友よはひ経ぬれば

五節は今日までの年月の長さを思って、物哀れになった心持ちを源氏が昔の自分に書いて告げただけのことである、これだけのことを喜びにしなければならぬ自分であるということをはかなんだ。

かけて言はば今日のこととぞ思ほゆる日かげの霜の袖にとけしも

にいなめまつりおみの新嘗祭のあおず小忌の青摺りを模様にした、この場合にふさわしい紙に、濃淡の混ぜようをおもしろく見せた漢字がちの手紙も、その階級の女には適した感じのよい返事の手紙であった。

若君も特に目だった美しい自家の五節を舞の庭に見て、逢つてものを言う機会を作りたく、楽屋のあたりへ行ってみるのであったが、近い所へ人も寄せないような警戒ぶりであったから、羞恥心しゅううちの多い年ごろのこの人は歎息たんそくするばかりで、それきりにしてしまった。美貌びぼうであったことが忘れなくて、恨めしい人に逢われない心の慰めにはあの人を恋人に得たいと思っていた。

五節の舞い姫は皆とどまって宮中の奉仕をするようとの仰せであったが、いったんは皆退出させて、近江守おうみのかみのは唐崎からさき、摂津守の子は浪速なにわで祓はらいをさせたいと願って自宅へ帰った。大納言も別の形式で宮仕えに差し上げることがを奏上した。左衛門督さえもんのかみは娘でない者を娘として五節に出したということで問題になったが、それも女官に採用されることになった。惟光これみつないしのすけは典侍の職が一つあいてある補充に娘を採用されたいと申し出た。源氏もその希望どおりに優遇をしてやってもよいという気になっていることを、若君は聞いて残念に思った。自分がこんな少年でなく、六位級に置かれているのでなければ、女官などにはさせないで、父の大臣に乞こうて同棲どうせいを黙認してもらうのであるが、現在では不可能なことである。恋しく思う心だけでも知らせずに終わるのかと、

たいした思いではなかったが、雲井の雁を思つて流す涙といつしよに、そのほうの涙のこぼれることもあった。五節の弟で若君にも丁寧
に臣礼を取つてくる惟光の子に、ある日逢つた若君は平生以上に親し
く話してやったあとで言つた。

「五節はいつ御所へはいるの」

「今年のうちだということですよ」

「顔がよかつたから私はあの人が好きになつた。君は姉さんだから毎日見られるだろうからうらやましいのだが、私にももう一度見せてくれないか」

「そんなこと、私だつてよく顔なんか見ることはできませんよ。男の兄弟だからって、あまりそばへ寄せてくれませんのですもの、それだ

のあなたなどにお見せすることなど、だめですね」

と言う。

「じゃあ手紙でも持って行つてくれ」

と言つて、若君は惟光これみつの子に手紙を渡した。これまでもこんな役をしてはいつも家庭でしかられるのであつたがと迷惑に思うのであるが、ぜひ持ってやらせたそうである若君が気の毒で、その子は家へ持って帰つた。五節は年よりもませていたのか、若君の手紙をうれしく思った。緑色の薄様うすようの美しい重ね紙に、字はまだ子供らしいが、よい将来のこもった字で感じよく書かれてある。

日かげにもしるかりけめや少女をとめご子が天の羽袖にかけし心は

姉と弟がこの手紙をいっしょに読んでいる所へ思いがけなく父の惟光大人が出て来た。隠してしまうこともまた恐ろしくてできぬ若い姉きよう弟だいであつた。

「それは、だれの手紙」

父が手に取るのを見て、姉も弟も赤くなつてしまつた。

「よくない使いをしたね」

としかられて、逃げて行こうとする子呼んで、

「だれから頼まれた」

と惟光が言つた。

「殿様の若君がぜひつておっしゃるものだから」

と答えるのを聞くと、惟光は今まで怒っていた人のようでもなく、

笑顔えがおになつて、

「何というかわいいたずらだろう。おまえなどは同じ年でまだまつたくの子供じゃないか」

とほめた。妻にもその手紙を見せるのであつた。

「こうした貴公子に愛してもらえば、ただの女官のお勤めをさせるより私はそのほうへ上げてしまいたいくらいだ。殿様の御性格を見ると恋愛関係をお作りになつた以上、御自身のほうから相手をお捨てになることは絶対にないようだ。私も明石あかしの入道になるかな」

などと惟光は言っていたが、子供たちは皆立つて行つてしまった。

若君は雲井の雁へ手紙を送ることもできなかつた。二つの恋をして
いるが、一つの重いほうのことばかりが心にかかつて、時間がたてば

たつほど恋しくなつて、目の前を去らない面影の主にもう一度逢う
ということもできぬかとばかり歎なげかれるのである。祖母の宮のお邸やしきへ
行くこともわけなしに悲しくてあまり出かけない。その人の住んでい
た座敷、幼い時からいっしょに遊んだ部屋などを見ては、胸苦しさを
つづるばかりで、家そのものも恨めしくなつて、また勉強所はなちるさとにばかり
引きこもっていた。源氏は同じ東の院の花散里夫人はなちるさとに、母としての若
君の世話を頼んだ。

「大宮はお年がお年だから、いつどうおなりになるかしれない。お墓かみ
れになつたあとのことを思うと、こうして少年時代から馴ならしておい
て、あなたの厄介やっかいになるのが最もよいと思う」

と源氏は言うのであつた。すなおな性質のこの人は、源氏の言葉に

絶対の服従をする習慣から、若君を愛して優しく世話をした。若君は養母の夫人の顔をほのかに見ることもあった。よくないお顔である。こんな人を父は妻としていることができるのである、自分が恨めしい人の顔に執着を絶つことのできないのも、自分の心ができ上がっていないからであろう、こうした優しい性質の婦人と夫婦になりえたら幸福であろうと、こんなことを若君は思ったが、しかしあまりに美しくない顔の妻は向かい合った時に気の毒になってしまふであろう、こんなに長い関係になつていながら、容貌ようぼうの醜みにくなる点、性質の美な点を認めた父君は、夫婦生活などは疎おろそかにして、妻としての待遇にできるかぎりの好意を尽くしていられるらしい。それが合理的なようであるとも若君は思った。そんなことまでもこの少年は観察しえたのである。大

宮は尼姿になっておいでになるがまだお美しかったし、そのほかどこでこの人の見るのも相当な容貌が集められている女房たちであつたから、女の顔は皆きれいなものであると思つていたのが、若い時から美しい人でなかつた花散里が、女の盛りも過ぎて衰えた顔は、瘦やせた貧弱なものになり、髪も少なくなつていたりするのを見て、こんなふう
に思うのである。

年末には正月の衣裳いしやうを大宮は若君のためにばかり仕度したくあそばされた。幾重ねも美しい春の衣服のでき上がっているのを、若君は見るのもいやな気がした。

「元旦だつて、私は必ずしも参内するものでないのに、何のためにこんなに用意をなさるのですか」

「そんなことがあるものですか。廢人の年寄りのようなことを言う」

「年寄りではありませんが廢人の無力が自分に感じられる」

若君は独言ひとりごとを言つて涙ぐんでいた。失恋を悲しんでいるのであろうと、哀れに御覧になつて宮も寂しいお顔をあそばされた。

「男性というものは、どんな低い身分の人だつて、心持ちだけは高く持つものです。あまりめいつたそうしたふうは見せないようになさいよ。あなたがそんなに思い込むほどの価値のあるものはないではないか」

「それは別にないのですが、六位だと人が輕蔑けいべつをしますから、それはしばらくの間のことだとは知っていますが、御所へ行くのも気がそれで進まないのです。お祖父様じいがおいでになつたら、戲談じょうたんにでも人は私

を軽蔑なんかしないでしょう。ほんとうのお父様ですが、私をお扱いになるのは、形式的に重くしていらつしやるとしか思われません。二条の院などで私は家族の一人として親しませてもらうようなことは絶対にできません。東の院でだけ私はあの方の子らしくしていただけません。西の対のお母様だけは優しくしてくださいませ。もう一人私にほんとうのお母様があれば、私はそれだけでもう幸福なのでしょうが祖母様」

涙の流れるのを紛らしている様子のかわいそうなのを御覧になって、宮はほろほろと涙をこぼしてお泣きになった。

「母を亡くした子というものは、各階級を通じて皆そうした心細い思いをしているのだけれど、だれにも自分の運命というものがあって、

それぞれに出世してしまえば、軽蔑する人などはないのだから、そのことは思わないほうがいいよ。お祖父様がもうしばらくでも生きていてくださったらよかったのだね、お父様がおいでなんだから、お祖父様くらいの愛はあなたに掛けていただけると信じてますけれど、思うようには行かないものなのだね。内大臣もりつばな人格者のように世間で言われていても、私に昔のような平和も幸福もなくなっていくのはどういうわけだろう。私はただ長生きの罪にしてあきらめませんが、若いあなたのような人を、こんなふうになんか少しでも厭世的えんせいにする世の中かと思うと恨めしくなります」

と宮は泣いておいでになった。

元日も源氏は外出の要がなかったから長閑のどかであった。良房よしふさの大臣の

賜わった古例で、七日の白馬あおうまが二条の院へ引かれて来た。宮中どおりに行なわれた荘重な式であった。

二月二十幾日に朱雀院すざくへ行幸があつた。桜の盛りにはまだなつていなかったが、三月は母後の御忌月おんきづきであつたから、この月が選ばれたのである。早咲きの桜は咲いていて、春のながめはもう美しかった。お迎えになる院のほうでもいろいろの御準備があつた。行幸の供奉ぐぶをする顯官も親王方もその日の服装などに苦心を払つておいでになつた。その人たちは皆青色の下に桜襲さくらがさねを用いた。帝は赤色の御服であつた。お召しがあつて源氏の大臣が参院した。同じ赤色を着ているのであつたから、帝と同じものと見えて、源氏の美貌びぼうが輝いた。御宴席に出た人々の様子も態度も非常によく洗練されて見えた。院もますます清艶せいえん

な姿におなりあそばされた。今日は専門の詩人はお招きにならないで、詩才の認められる大学生十人を召したのである。これを式部省しきぶしょうの試験に代えて作詞の題をその人たちはいただいた。これは源氏の長男のためにわざとお計らいになったことである。気の弱い学生などは頭もぼうとさせていて、お庭先の池に放たれた船に乗って出た水上で製作に苦しんでいた。夕方近くなって、音楽者を載せた船が池を往来して、楽音を山風に混ぜて吹き立てている時、若君はこんなに苦しい道を進まないでも自分の才分を發揮させる道はあるであろうかと恨めしく思った。「春鶯囀しゅんおうづてん」が舞われている時、昔の桜花の宴の日のことを院の帝はお思い出しになって、

「もうあんなおもしろいことは見られないと思う」

と源氏へ仰せられたが、源氏はそのお言葉から青春時代の恋愛ざんまい三昧を忍んで物哀れな気分になった。源氏は院へ杯を参らせて歌った。

うぐひす
鶯のさへづる春は昔にてむつれし花のかげぞ変はれる

院は、

九重を霞かすみへだつる住処すみかにも春と告げくる鶯の声

とお答えになった。太宰帥だざいのそつの宮といわれた方は兵部卿ひょうぶきょうになっておいでになるのであるが、陛下へ杯を献じた。

いにしへを吹き伝へたる笛竹にさへづる鳥の音ねさへ変はらぬ

この歌を奏上した宮の御様子がことにりっぱであった。帝は杯をお取りになつて、

鶯の昔を恋ひて囀さへづるは木こづたふ花の色やあせたる

と仰せになるのが重々しく気け高だかつた。この行幸は御家庭的なお催しで、儀式ばつたことではなかつたせいなのか、官人一同が詞歌を詠進したのではなかつたのかその日の歌はこれだけより書き置かれていない。

奏樂所が遠くて、細かい楽音が聞き分けられないために、樂器が御前へ召された。兵部卿の宮が琵琶、内大臣は和琴、十三絃が院の帝の御前に差し上げられて、琴は例のように源氏の役になった。皆名手で、絶妙な合奏樂になった。歌う役を勤める殿上役人が選ばれてあつて、「安名尊」が最初に歌われ、次に桜人が出た。月が朧ろに出て美しい夜の庭に、中島あたりではそこかしこに篝火が焚かれてあつた。そうしてもう合奏が済んだ。

夜ふけになつたのであるが、この機会に皇太后を御訪問あそばさないうことも冷淡なことであると思召して、お帰りがけに帝はそのほうの御殿へおまわりになつた。源氏もお供をして参つたのである。太后は非常に喜んでお迎えになつた。もう非常に老いておいでになるのを、

御覧になつても帝は御母宮をお思い出しになつて、こんな長生きをされる方もあるのにと残念に思召された。

「もう老人になつてしまひまして、私などはすべての過去を忘れてしまつておりますのに、もつたない御訪問をいただきましたことから、昔の御代みよが忍ばれます」

と太后は泣いておいでになつた。

「御両親が早くお崩れかくになりました以来、春を春でもないように寂しく見ておりましたが、今日のはじめて春を十分に享樂いたしました。また伺いましょう」

と陛下は仰せられ、源氏も御挨拶あいさつをした。

「また別の日に伺候いたしまして」

還幸の鳳輦ほうれんをはなやかに百官の圍繞いにようして行く光景が、物の響きに想像される時にも、太后は過去の御自身の態度の非を悔いておいでになった。源氏はどう自分の昔を思っているであろうと恥じておいでになった。一国を支配する人の持つている運は、どんな咀のろいよりも強いものであるとお悟りにもなった。

おぼろづきよないしのかみ
朧月夜の尚侍も静かな院の中にいて、過去を思う時々、源氏とした恋愛の昔が今も身にしむことに思われた。近ごろでも源氏は好便に託して文通をしているのであった。太后は政治に御注文ちゆうもんをお持ちになる時とか、御自身の推薦権の与えられておいでになる限られた官爵の運用についてとかに思召しの通らない時は、長生きをして情けない末世に苦しむというようなことをお言い出しになり、御無理も仰せられ

た。年を取っておいでになるにしたがって、強い御氣質がますます強くなつて院もお困りになるふうであつた。

源氏の公子はその日の成績がよくて進士になることができた。碩学せきがくの人たちが選ばれて答案の審査にあたつたのであるが、及第は三人しかなかつたのである。そして若君は秋の除目じもくの時に侍従に任ぜられた。雲井くもいの雁かりを忘れる時がないのであるが、大臣が嚴重に監視しているのも恨めしくて、無理をして逢つてみようともしなかつた。手紙だけは便宜を作つて送るといふような苦しい恋を二人はしているのであつた。

源氏は静かな生活のできる家を、なるべく広くおもしろく作つて、別れ別れにいる、たとえば嵯峨さがの山莊の人などもいつしよに住ませた

いという希望を持って、六条の京極の辺に中宮ちゆうぐうの旧邸のあつたあたり四町四面を地域にして新邸を造営させていた。式部卿の宮は来年が五十におなりになるのであつたから、紫夫人はその賀宴をしたいと思いますと思つて仕度したくをしているのを見て、源氏もそれはぜひひともしなければならぬことであると思ひ、そうした式もなるべくは新邸でするほうがよいと、そのためにも建築を急がせていた。春になつてからは専念に源氏は宮の五十の御賀の用意をしていた。落し忌おとしいみの饗宴きやうえんのこと、その際の音楽者、舞い人の選定などは源氏の引き受けていることで、付帯して行なわれる仏事の日の経卷や仏像の製作、法事の僧たちへ出す布施ふせの衣服類、一般の人への纏頭てんとうの品々は夫人が力を傾けて用意していることであつた。東の院でも仕事を分担して助けていた。花散里夫人はなぢるさとと紫

の女王によわうとは同情を互いに持つて美しい交際をしているのである。世間までがこのために騒ぐように見える大仕掛けな賀宴のことを式部卿の宮もお聞きになった。これまではだれのためにも慈父のような広い心を持つ源氏であるが御自身と御自身の周囲の者にだけは冷酷な態度を取り続けられておいでになるのを、源氏の立場になつてみれば、恨めしいことが過去にあつたのであろうと、その時代の源氏夫婦を今さら気の毒にもお思いになり、こうした現状を苦しがつておいでになつたが、源氏の幾人もある妻妾さいしやうの中の最愛の夫人で女王があつて、世間から敬意を寄せられていることも並み並みでない人が娘であることは、その幸福が自家へわけられぬものにもせよ、自家の名誉であることは違ひないと思つておいでになつた。それに今度の賀宴が、源氏の勢

力のもとでかつてない善美を尽くした準備が調えられているということをお知りになったのであるから、思いがけぬ老後の光栄を受けると感激しておいでのなるが、宮の夫人は不快に思っていた。女御によごの後宮の競争にも源氏が同情的態度に出ないことで、いよいよ恨めしがっているのである。

八月に六条院の造営が終わって、二条の院から源氏は移転することになった。南西は中宮の旧邸のあった所であるから、そこは宮のお住すま居になるはずである。南の東は源氏の住む所である。北東の一带は東の院の花散里、西北は明石夫人あかしと決めて作られてあった。もともとあった池や築山つぎやまも都合の悪いのはこわして、水の姿、山の趣も改めて、さまざまに住み主の希望を入れた庭園が作られたのである。南の

東は山が高く、春の花の木が無数に植えられてあった。池がことに自然にできていて、近い植え込みの所には、五葉ごよう、紅梅、桜、藤ふじ、山吹ふき、岩躑躅いわつづじなどを主にして、その中に秋の草木がむらむらに混ぜてある。中宮のお住居すまいの町はもとの築山に、美しく染む紅葉もみじを植え加えて、泉の音の澄んで遠く響くような工作がされ、流れがきれいな音を立てるような石が水中に添えられた。滝を落として、奥には秋の草野が続けられてある。ちようどその季節であったから、嵯峨さがの大井の野の美観がこのために軽蔑けいべつされてしまいそうである。北の東は涼しい泉があつて、ここは夏の庭になっていた。座敷の前の庭には呉竹くれたけがたくさん植えてある。下風の涼しさが思われる。大木の森のような木が深く奥にはあつて、田舎いなからしい卵うの花垣はながきなどがわざと作られていた。昔

の思われる花橘はなたちばな、撫子なでしこ、薔薇そうび、木丹くたになどの草木を植えた中に春秋のものも配してあつた。東向いた所は特に馬場殿になつていた。庭には埒らちが結ばれて、五月の遊び場所ができていたのである。菖蒲しょうぶが茂らせてあつて、向かいの厩うまやには名馬ばかりが飼われていた。北西の町は北側にずっと倉が並んでいるが、隔ての垣かきには唐竹からたけが植えられて、松の木が多いのは雪を楽しむためである。冬の初めに初霜のとまる菊の垣根、朗らかな柞原ははそはら、そのほかにはあまり名の知れていないような山の木の枝のよく繁しげつたものなどが移されて来てあつた。

秋の彼岸のころ源氏一家は六条院へ移つて行つた。皆一度にと最初源氏は思つたのであるが、仰山きやうざんらしくなることを思つて、中宮のおはいりになることは少しお延ばしさせた。おとなしい、自我を出さない

花散里を同じ日に東の院から移転させた。春の住居すまいは今の季節ではな
いようなもののやはり全体として最もすぐれて見えるのがここであつ
た。車の数が十五で、前駆には四位五位が多くて、六位の者は特別な
縁故によって加えられたにすぎない。たいそうらしくなることは源氏
が避けてしなかつた。もう一人の夫人の前駆その他もあまり落とさな
かつた。長男の侍従がその夫人の子になっているのであるからもつと
もなことであると思えた。女房たちの部屋の配置、こまごまと分けて
部屋数の多くできていることなどが新邸の建築のすぐれた点である。
五、六日して中宮が御所から退出しておいでのになった。その儀式はさ
すがにまた派手はでなものであつた。源氏を後援者にしておいでになる方
という幸福のほかにも、御人格の優しさと高潔さが衆望を得ておいで

になることがすばらしいお后様きとぎであつた。この四つに分かれた住居すまいは、塀へいを仕切りに用いた所、廊で続けられた所などもこもごもに混ぜて、一つの大きい美観が形成されてあるのである。九月にはもう紅葉もみじがむらむらに色づいて、中宮の前のお庭が非常に美しくなつた。夕方に風の吹き出した日、中宮はいろいろの秋の花紅葉を箱の蓋ふたに入れて紫夫人へお贈りになるのであつた。やや大柄な童女が深紅しんくの袖あこめを着、紫苑色しおんの厚織物の服を下に着て、赤朽葉色くちばの汗衫かざみを上にした姿で、廊の縁側を通り渡殿わたどのの反橋そりはしを越えて持つて来た。お后が童女をお使いになることは正式な場合にあそばさないことなのであるが、彼らの可憐かれんな姿が他の使いにまさると宮は思召したのである。御所のお勤めなに馴なれている子供は、外の童女と違つた洗練された身のとりなしも見え

た。お手紙は、

心から春待つ園はわが宿の紅葉を風につてにだに見よ

というのであった。若い女房たちはお使いをもてはやしていた。こちらからはその箱の蓋へ、下に苔こけを敷いて、岩を据すえたのを返しにした。五葉の枝につけたのは、

風に散る紅葉は軽し春の色を岩根の松にかけてこそ見め

という夫人の歌であった。よく見ればこの岩は作り物であった。す

ぐにこうした趣向のできる夫人の才に源氏は敬服していた。女房たちも皆おもしろがっているのである。

「紅葉の贈り物は秋の御自慢なのだから、春の花盛りにこれに對することは言っておあげなさい。このごろ紅葉を悪口することは立田たつた姫に遠慮すべきだ。別な時に桜の花を背景にしてものを言えば強いことも言われるでしょう」

こんなふうにいつまでも若い心の衰えない源氏夫婦が同じ六条院の人として中宮と風流な戯れをし合っているのである。大井の夫人は他の夫人のわたましがすっかり済んだあとで、価値のない自分などはそつと引き移ってしまいたいと思っていて、十月に六条院へ来たのであった。住居すまいの中の設備も、移って来る日の儀装のことも源氏は他の

夫人に劣らせなかった。それは姫君の将来のことを考えているからで迎えてからも重々しく取り扱った。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML (一部は HTML) 形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ 2016年3月15日 第一期製作

原稿 青空文庫
発行者 佐藤 聖
発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘C室
mail : issatudo@gmail.com
